の内容は、ピシュタコやカリシリといった怪物のイメージが現実の人々の生活の中でいまだ息づいており、それが原因で事件が起こり、共同体を破壊していく様子がドラマ化されている（そのうち学会等で発表したいと思う）。これらのことから、アンデスにおける悪魔的表象は、つくづく、そこに生きる人間にとっての「生きた神話」なのだな、と納得させられたのである。

『朝倉世界地理講座―大地と人間の物語― 14 ラテンアメリカ』（朝倉書店、2007 年）✍ 国立民族学博物館・鈴木　紀

本書は朝倉書店から刊行されている世界地理講座―大地と人間の物語―シリーズの第 14 巻にあたり、ラテンアメリカの地理を一般読者に紹介する本である。本書の編者は坂井正人、私、松本栄次の 3 人だが、以下の文章は私の個人的な見解にもとづいている。そのため必ずしも他の編者が同意するとは限らないことを最初にお断りしておきたい。

本書と自分との関係について振り返ってみると、私の中には相反する感情がわき上がる。一方で執筆者 45 人、総ページ数約 500 ページ（写真ページ、目次などを含む）の大部な本をなんとか出版できたという感慨がある。編集作業を通して執筆者のさまざまな問題意識に触れ、新しい情報と精緻な分析を知り、私の中のラテンアメリカ観がめざましく深化したことには今でも感動を覚える。他方、編者間のコミュニケーション不足、自身の編集の不手際と怠惰などの結果、出版が大幅に遅れたことに対して自責の念にかられる。執筆者の方々にも出版社にもたいへんな迷惑をおかけした。この場をかりてお詫び申し上げたい。

さて以下では本書の内容紹介は行わない。目次を書き出すだけでもたくさんの紙面を埋めてしまう。また本書の性質上すべてが各論から成立しているため、全体を要約することは容易でない。本書の概要は本書冒頭の「本書の構成」（xi–xviii 頁）を参照していただきたい。むしろここでは私が「ラテンアメリカを表象する」という仕事にどのように取り組んだかを回顧しておきたい。読者の中には私と同様、今後ラテンアメリカに関する論文集を編集する機会をもつ方もいるだろう。またそうした論文集に自分の論文を投稿する方はさらに多いはずだ。そして本誌の読者ならだれしもそうした著作を読む機会があるだろう。つまりすべての方に、ラテンアメリカに関する論集を編集することの難しさを知っていただき、各自のラテンアメリカ研究の参考にしていただければ幸いである。

まず私が本書の編者となったいきさつに触れておこう。本シリーズ全体の編集幹事であり、私の旧知の坂井正人氏から編者となるよう依頼されたことが事のはじまりだった。ラテンアメリカ全域が対象ときいて大変だとは思ったが、地理学というよりも地域研究として考えればよいという話をきいて少し心が動いた。坂井氏と私の研究内容は異なるが、共に人類学の研究者である。私のもくろみとしては、二人で分担すれば、地理学をかぎりなく人類学化したラテンアメリカ論集が作れるというものだった。また私の個人的関心としては、メキシコの先住民族研究の後、地域を限定しない開発研究にしばらく携わっていたので、もう一度ラテンアメリカ研究者としての視座をリフレッシュさせたいという動機もあった。こうした理由からあまり躊躇することなく坂井氏の要請を承諾した。明らかに楽天的な選択だったが、これによってほどなく某大な仕事の渦に巻き込まれることになった。

本書の内容を企画する際に私が悩んだのは、ラテンアメリカという広大な時空間をどのように表象するかという問題である。さっそく「ラテンアメリカ」と「地理」をキーワードに最近の文献を探し、しばらくの間はそうした先行研究を読みながら構想をねった。中でもヒントになったのは、本書の拙稿（14–23 頁）でも触れたジョーンズの「想像の地理学 (imaginative geographies)」という議論である。それによると「ラテンアメリカは現実のサイト (site) であると同時に、サイト (sight)、すなわち言葉と図像によって現実空間の外部にずらされた場所の表象である」という（Jones 2003）。sight は日本語でいえば「眺め」や「まなざし」にあたるだろう。sight は site に忠実であろうとしても、それを語り描く者の主観に多少とも影響を受けることになる。多少どころか、中には意図的な誇張やもっともらしい嘘が混じることもあるだろう。つまり地理の記述は現実の site に関する客観的情報ではなく、その site を描く者の想像力の産物であるということだ。ジョーンズは sight の極端な例としてステレオタイプ化したブラジル人を描く漫画を示しているが、訓練をうけた地理学者ならば site を確実に描けるかどうかは論じていない。私はこれに対し懐疑的だ。なぜならこの議論は、文化人類学者の間ですでに常識となっている部分的真実としての民族誌（クリフォード 1996）という議論を思い起こさせるからだ。クリフォードは人類学者の書く民族誌はフィクション＝部分的真実にすぎないという。それは人類学者が偏見に満ちているからでも力量不足だからでもなく、民族誌を書くという行為そのものが現実を故意に整理し不要な部分を切り捨てる作業であるからだ。クリフォードの考え方を当てはめれば、だれが書いても地理の記述は sight にすぎず、それは site に関する部分的真実ということになるのだろう。

それではラテンアメリカの地理を読者にどう伝えたらよいのか。その手段として私にゆだねられたのは site を体感するスタディツアーなどではなく、文字と写真による解説書、すなわち sight の束である。そうであるならば個々の記述がそれぞれの執筆者の想像力に影響されていようとも、それをマイナスと考えるべきではないかもしれない。むしろさまざまな想像力を読者に提示することが、バランスのとれたラテンアメリカ理解を促進するのではないかと考えた。したがって編者としての私の仕事は、執筆者への干渉を極力さけ、彼／女らが書きたいことをのびのびと書いてもらうことだと思えてきた。

そうはいっても本書の出版にあたっては、無論、出版社側の意向を尊重する必要もあった。少なくとも次の 3 点は無視するわけにいかなかった。

第 1 に本書の「刊行のことば」（i–ii 頁）にあるように、本シリーズはできるだけすみやかに刊行すること（！）を最大の目標としていた。なぜならば本シリーズの前身である「世界地理」シリーズは刊行開始から 30 年を経てもなお全巻完結していない（！？）からだ。そのために執筆陣に若手研究者を多用するという方針がとられている。立場の弱いものをこきつかうというニュアンスを感じないでもなかったが、私としては、むしろ院生や若手研究者に業績発表の場を提供するよい機会と考えることにした。

第 2 に本シリーズの監修者である安田喜憲氏の関心を反映して「環境史」が編集のキーワードとなっていた。そのため考古学者や歴史学者の考察を積極的に掲載するという方針も存在した。これにより地理学以外の文章を掲載することに躊躇する必要がなくなり、私としては安堵した。しかし当初の噂に反して、本書を含むシ

リーズ全体の名称は世界地理講座であり、そこに地理という言葉が残ることもやがて明らかにされた。その影響もあり地理学プロパーの松本栄次氏が本書の第3の編者として加わることになった。その段階で私たち編者同士がもっとよく話し合えば、それぞれの発想をもちよって環境史という一つのテーマをもった本をつくることができたかもしれない。ところが現実には各自の専門に基づいて分業するという方向で編集作業が動きだした。つまり坂井氏が先史考古学と植民地時代の歴史、私がラテンアメリカの現代を扱う社会科学全般（文化人類学、経済学、政治学など）、松本氏がブラジル・アマゾンを中心とする地理学の担当となり、原稿集めを始めたのである。

第3に出版社が想定する本書の読者層を考慮する必要もあった。1冊18,000円もする本書のターゲットは明らかに個人読者ではない。世界地理に関するレファランス資料として、一般の図書館、とくに全国の高等学校の図書館に売り込むのが出版社の販売戦略だときいた。高校生にもわかる平易な記述が必要なのである。またレファランス資料であるため、ラテンアメリカに関する基礎的、概論的な情報を「真実」として提示する必要もあった。これは先に述べた「想像の地理学」のsight論とは対極にある要求である。折衷案として、基本的に文章の内容は執筆者の自由にまかせたが、一部の執筆者には文章の導入部に、その章に関連する地域の地理的・歴史的概説（例えばカリブ海地域概説）や、関連するトピックの概説（例えば南アメリカにおける人種的特徴）を加えてもらうことにした。

実際の編集作業は何度も停滞した。手元の資料やメールの記録をたどると、2003年5月に執筆予定者に依頼状を出し、2004年初めに原稿のレジュメ提出、3月に原稿提出をお願いした。大半の執筆者はこの締め切りを守ってくれた。しかし20数本の原稿を前に私の査読は遅々として進まず、ようやく2004年の夏休みになって原稿を丁寧に読み始める状況だった。私の査読方針は、先に述べたとおり、内容にはなるべく立ち入らず、もっぱら一般読者へのわかりやすさという点から、論理の明確さと専門用語の乱用をチェックした。各原稿に対して質問やコメント、修正案を書き、2004年の秋ごろから執筆者に改稿を依頼した。このプロセスで、編者の中には専門論文として完成度を求めた者もいたようである。特に執筆者が大学院生の場合は、かなりの教育的指導が行われたらしい。

こうして原稿を確定し、編者から出版社に入稿するまでにさらに1年半の時間を要した。それだけ時間がかかった理由は、改稿と査読が繰り返されたためだが、編者および執筆者の多くが調査や留学にでかけて作業が断続的にしか進められなかったことも一因である。そして正直にいえば、私自身の原稿執筆が大幅に遅れた。私の担当した総説は全体を見渡さなければ書けないと考え、他の執筆者の原稿編集を優先させたからなのだが、気がつけば私自身が出版遅延の原因になっていたのである。完成原稿を出版社に渡し、出版社から執筆者に初校を送ったのは2006年夏である。校正が進んでいる間は編者の仕事は休めたが、2007年春には口絵写真の選択など最終的な編集作業を編者と出版社の共同で行った。ようやく出版にこぎつけたのは2007年夏であった。原稿の依頼から4年以上の時間がすぎていた。

以上が本書出版の経緯である。各執筆者の発想をいかしながら、全体としては多様な切り口でラテンアメリカを描く試みを皆さんはどう評価するだろうか。個人で購入するにはあまりにも高額なので、どうか近隣の図書館や大学に購

入希望を出し、手にとっていただければ幸いである。考えてみれば、本書を始めから終りまで通読する人はほとんどいないはずだ。関心のある部分だけ読むことが普通だろう。ただしその場合も、なるべく関連する章にも目をくばり、執筆者諸氏のたくさんの想像力に触れていただきたいと思う。

参考文献

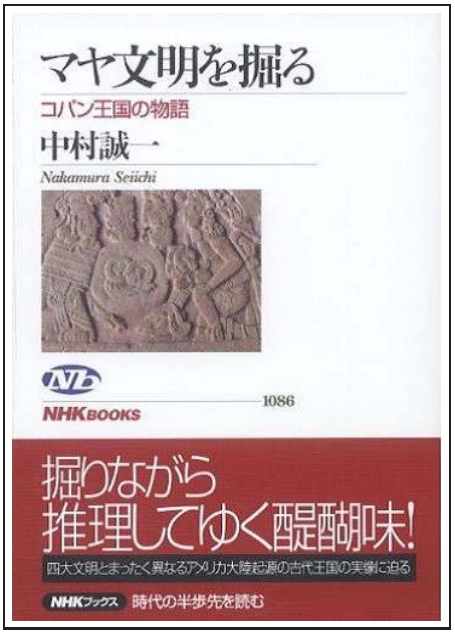
Jones, Gareth A. 2003. “Latin American geographies”. In Philip Swanson ed. *The Companion to Latin American Studies*. Pp.5-25. London: Arnold.

クリフォード、ジェイムス 1996.「序論―部分的真実―」ジェイムス・クリフォード、ジョージ・マーカス編『文化を書く』pp.1-50、東京：紀伊國屋書店.

『マヤ文明を掘る―コパン王国の物語―』（NHKブックス、2007年）✍サイバー大学世界遺産学部・中村 誠一

独自の芸術を開花させた都市国家：コパン

ユネスコ登録の世界文化遺産「コパンのマヤ遺跡」は、ホンジュラス西部、隣国グァテマラとの国境からわずか12キロの場所にある。紀元前1400年頃、コパン川沿いに形成された山間の渓谷に土器を伴う農耕民が定住し、現在のグァテマラからエル・サルバドルにかけての高地や太平洋岸の居住民と強いつながりを持ちつつ、メソアメリカ各地の社会と交易を行いながら発展していった。後世の碑文によれば、この谷間に西暦427年、グァテマラのペテン地方から「ヤシュ・クック・モ」と呼ばれる人物（に率いられたマヤ系の集団）がやって来た。彼に



よって開かれた王朝は、西暦820年頃まで続く。王朝崩壊後もコパン谷には、100～150年くらいの間は居住民がいたが、紀元後1000年以降になるとほとんどいなくなる。やがてこの地は亜熱帯の雨林に覆われ、全盛期には3万人ほどの人口をもち栄華を誇っていた都市も廃墟と化してしまう。

コパンは、マヤ文明の都市遺跡の中でも19世紀から各国の研究者に注目されてきた遺跡である。おそらくその理由は、コパンにはマヤ文字の刻まれた記念碑、立体的な石造彫刻や漆喰レリーフで飾られた建造物、ヒスイ製や貝製の傑出した装飾品、デザインの洗練された多彩色土器、といった「マヤ文明」を定義するときに初期の考古学者たちが注目した物質的な文化要素がすべて存在しているからではなかったか、と思われる。つまり、地理的にはメキシコ南部からホンジュラスの西部にまたがるマヤ地域の周縁に位置しているが、コパンはマヤ文明の中心そのものだったからである。現在、コパンは、